小人族（パルゥム）の冒険・下

novels
大森藤ノ
illustration
はいむらきよたか

鋭い一閃が、モンスターの胸もとに叩き込まれる。
『グガァ!?』
絶命を言い渡した槍の穂先は、更なる加速をもって左右にいた怪物どもの急所に一撃を見舞った。雄鹿のモンスター『ソード・スタッグ』の絶叫が木々の間に反響する。
「これが『神の恩恵』か……なるほど、いいね」
黄金の髪を揺らすフィンはたった一人、モンスターの群れを相手取っていた。
場所は『プレブリカの村』から出た山の中腹。木々が薄れ、長槍の特性を発揮できる開けた地形である。近頃モンスターの動きが活発で困っている、という商人の依頼を受けてフィンは怪物退治に臨んでいた。いや、正確には【ステイタス】の力を確かめるための『腕試し』といった方が正しい。
槍を軽々と振るう腕力の向上、複数のモンスターの動きを正確に捉える動体視力、敵の爪牙を掠らせもしない素早い身のこなし。『肉体が躍動する』という感覚を初めて味わう。
神の眷族の一員となったフィンは己に刻まれし力を分析し、体感し、興奮する。
「いーや、うちらの『恩恵』は促進剤……切っかけに過ぎん。それは全部、フィンの中に眠っていた力や」
フィンの呟きを否定するのは、傍観しているロキだ。
『神の恩恵』について解説する彼女は頭の後ろに両手を組み、得意気な笑みを浮かべていた。
「ここら辺の怪物を倒せば報酬もらえるんやろ？　記念すべき眷族デビュー戦っちゅうことで酒を奢ってくれー、フィーン！　可愛い子供のお金で奢られて喜ばない神はおらーん！」

「何でも奢るから、大人しく村で待っててほしかったなぁ……」

戦場のド真ん中に突っ立った挙句、いけいけと両手を振り回して度々モンスターの標的対象にされる主神に、フィンは苦笑を落としながら片手間で守り続ける。

『コボルト』の群れをあしらう傍ら、ロキに突っ込もうとする猪のモンスター『バトルボア』を、翻す一撃で苦もなく屠った。

（んー、強いなぁ。ちゅうか、綺麗や。【ステイタス】の力に寄りかかるんやなくて、『戦い方』を極めてるのがド素人のうちにもわかる）

興味半分で付いてきたロキの目から見ても、華麗、と呼べる槍捌きだった。

いくら『神の恩恵（ファルナ）』を得たからといって、敵勢が十匹にも及ぶ数の多寡は苦戦する筈だ。だがフィンはそれを物ともしない。身の丈の二倍以上ある長槍を軽々と扱う彼には戦士の貫禄があった。それは授かったばかりの【ステイタス】を差し引いても、確たる自力を有しているということだ。

何より小人族（パルゥム）が失ったといわれている胆力――『勇気』をその小さな身に秘めている。

『アアアアアアアアアアアアアアアアアア⁉』

野猿のモンスター『シルバーバック』から一段と甲高い断末魔の叫びが放たれる。それが戦闘の終了を告げた。フィンは赤く染まった愛槍を振り鳴らし、返り血を飛ばす。

「ひとまず、終わりかな？」

「おー、お疲れちゃーん。どうやった、デビュー戦の感触は？」

「力の差を如実に実感できたよ。【ステイタス】を授かれば幼い子供でもモンスターを撃退できる、なんて眉唾物だった噂も今なら信じられる」

一息つくフィンはロキに返答しながら、戦利品の収拾を始めた。

モンスターの胸部から小指の爪より小さい『魔石』をくり抜いて、亡骸を灰へと変えていく。

地上のモンスターの核は迷宮（オリジナル）のモンスターより遥かに小さい。何十個かき集めたところで換金額はたかが知れているが、商人と交渉できるだけマシだ。何よりモンスターの死骸を放置することは危険を招く恐れがある。

フィンは手慣れた様子で灰の山からモンスターの爪や毛皮――『魔石』より遥かに高く買い取ってもらえる――いわゆる『ドロップアイテム』と呼ばれるものを集めていく。

「なぁー、フィン。聞いてもええか？」

「何だい、ロキ？」

「自分の野望は、小人族（パルゥム）の英雄になることやろ？」

「語弊はあるけど、まぁ間違ってはいないね」

「なら、何でさっさと【ファミリア】に入らんかったんや？　『恩恵』を得た方がぽんぽんと強くなれるやろう？」

『神の恩恵（ファルナ）』は下界の住人の潜在能力を目覚めさせることもさることながら、その真骨頂は【経験値（エクセリア）】の獲得による発展性にある。【ステイタス】の更新によって育っていく『器』はおよそ人の一生をかけても得ることのできない『成長』をもたらす。昇格（ランクアップ）も含め、それは人類から限界を払拭するものであり、無限の可能性を解き放つものだ。

ロキが疑問を呈すると、亡骸のもとに屈み込んでいたフィンは立ち上がった。

「まずは精神……『器』に振り回されない『心』を培うことが先決だと考えていた。そちらの方が最終的に早く高みへ至ることができる、そう思ってね」

「ほーぅ？」

「教養に雑学、戦い方にまつわる『技と駆け引き』……辺鄙な山奥にいた修行僧に頼み込んでこの四年間、稽古をつけてもらっていた。あとは、そうだね、『恩恵』を得ていない自分がどこまでやれるのか見極めたかった、からかな」

自分の『器』を知り、将来の可能性を広げたかった。フィンはそう締めくくる。
やはりフィンは他の下界の住人と一線を画していた。【ステイタス】を授かって力に酔いがちな彼等とは異なり、まずは己の内面を磨いたのだ。逸る心を抑え、最終的な大成を見据えて最適な方法を選択している。そしてそれは正しい。
フィン・ディムナは、たとえば迷宮都市（オラリオ）の冒険者が迎える苦労とは無縁の位置にいる。往々にして【ステイタス】に依存してしまう駆け出しの冒険者は、早かれ遅かれ戦闘の技術不足に悩まされることになるが、この小さな小人族（パルゥム）は困難に直面した時、柔軟な知恵と積み重ねた経験、培われた技術によってそれを超克する術を持っている。もし急成長を遂げる新人（スーパー・ルーキー）冒険者がいたとしても、基盤をしっかり固めているフィンの方が安定的に、より早く、そしてしたたかにダンジョンを攻略していくことだろう。彼は慢心や驕りを消すばかりか、一流の戦士のように心身を御し、『器』と並んで『芯』を極めていたのだ。
ロキの視線の先にいるのは、Ｌｖ．１でありながら多彩な知識、そして『技と駆け引き』を備える精強な槍使（ランサー）いだ。
頼もしい限りや、とロキは思った。
だがその半面、物足りない、と思う心もあった。
彼はロキが手を貸してやらなくても『完成され過ぎている』から。
始まりの物語にありがちな、ゼロからぐんぐん成長を楽しむ遊戯（ゲーム）の醍醐味がないわー、とその一点だけは嘆いてしまう。
「……ま、ええわ。眷族が強いに越したことはないし。……それに、フィンのお嫁さん計画（笑）の方はまだまだ未完成やからなぁ～」
ロキは女神に似つかわしくない、親父臭い笑みを顔いっぱいに広げる。

「フィン～、いつ初恋の相手メリサたん口説きにいく～ん？」
「また突然だね……」
「そんなことないで～。フィンの伴侶（パートナー）になってくれるっちゅうことは、高確率でうちの【ファミリア】に加わるってことやからなぁ。仲間を増やすのは、派閥として急務やろ～？」
戦闘の後処理が終わるのを見計らって、ロキはたった一人の眷族にすり寄った。彼女のニヤニヤとした笑みに、フィンは最初から降参するように両手を上げる。
「フィンもメリサたんに交際を申し込む気、満々やろ？　神には嘘はつけへんで～」
「ロキ……間違ってないんだけど、もうちょっと手加減してくれないかな？」
「きっとメリサたんもフィンに気があるで～。『僕の子供を産んでくださーい！』って言ってもきっと受け入れてくれるわ。顔を真っ赤にしながらなぁ、グフフ～」
「だからロキ、言い方をさ……」
早まったかなぁ、と自分の野望を打ち明けてしまったことを軽く後悔して苦笑するフィン。
しばらく主神のイジリに付き合っていた彼は、そこで、辺りを見回した。
「……ンー」
「どうしたん？」
灰と化したモンスターの亡骸が散乱する森の中を見回すフィンに、ロキが首を傾げる。
「今回の依頼を出した商人は、山のモンスターの動きが活発になっていると言っていた。麓まで下りて旅人や行商に被害を出していると」
「あぁ、言ってたなぁ」
「これが同一の種族だったら何もおかしくないんだけどね……習性も異なる多種のモンスターが群れをなして、それも頻繁に事件を起こしているとなると、少し事情が違ってくる」
フィンがここで撃破したモンスターは『ソード・スタッグ』、『バトルボア』、『ゴブリン』、

『シルバーバック』、その他多岐にわたる。
ロキはみなまで聞かずともわかった。この山の『モンスターの動き』は下界でよく見受けられるものとは事情が異なっているのだと。
小人族（パルゥム）の少年は静かに右手の親指を舐めた。
「こういった場合は、主に二つの類型がある。一つは縄張り、棲息地が荒らされて興奮している時。そしてもう一つは――」
そのフィンの言葉を遮るように。
ドォンッ！　という激しい音響が、山の麓より上がった。
「……強大なモンスターによって、群れが率いられている時」
一驚するロキが顔を振り上げる中、フィンは視線を山裾の方角へ向けた。
亜人（デミ・ヒューマン）の中でも秀でた小人族（パルゥム）の視力が、その光景を正確に捉える。
麓に広がっているのは他ならない『プレブリカの村』。
そしてその村の外壁が、突破されていた。
それも多方面、モンスターの大軍によって。
「おいおい、フィン？　まさか……」
「ああ、そのまさかだ」
モンスターによる人里の襲撃である。
ふざけた態度を消すロキの隣で、未だに麓へ固定されているフィンの碧眼は、村に侵入していく一際巨大な影を視認した。
他種族のモンスターを率いる巨大な個体。図らずもフィンの読みは的中してしまった。
伴って強い疼きを上げる右手の親指。まるで警鐘を鳴らすように、『あれとは戦うな』とがなり立てるように、疼痛を発する。

彼の『勘』は、あれは今の自分(フィン)の手に余るほどの脅威であると物語っていた。
「……どうするんや？」
静かに問いかけてくるロキの視線を横顔に感じるフィンは、己の手を見下ろし――疼く親指ごと拳を作った。警鐘など握り潰す彼の瞳に映るのは、四年前に襲撃された故郷の村、そして自分を守って天に還った両親の最期である。
当時のあらゆる感情が蘇る。そして二度と失うものかという『勇気』の声が胸を打つ。
「そんなもの、決まっているだろう？」
目の前の人々を救えずして、何が希望(フィン)だ。
黄金(こがね)の髪を揺らしながら、フィンは己の主神に笑みを返した。
「行こう。村を救う」